

端末環境で 指導と評価一体化

道教大附属函館中 研究大会

【函館発】道教育大学附属函館中学校（小林真 校長）は1日、6年度教育研究大会をオンラインで開催した。各教科の研究概要や動画資料を事前に公開し、当日は外部講師の講演や授業別分科会を実施。英語科授業では、自ら学習を調整する力の育成に向けて、学習の形態や方略を自己選択・自己決定する環境整備に重点を置いた実践を紹介した。



研究主題は「1人1台端末からICTを活用した末環境における指導と評価」学習評価の在り方、「学習の一体化の実現」で、4年、履歴の活用による学びの改善を中心に研究を進め、生徒自身がより良い学習改善を行うために主体的に学習に向かう力を高める必要性を表明。

本年度は「自ら学習を調整しながらねばり強く学習に取り組む態度の育成」を副主題に掲げて、学校生活および各教科学習の中で、生徒の自己決定や計画・実行・振り返りの

プロセスを重視した取組を進めている。

研究大会開催に当たっては、国語科、社会科、数学科、英語科、総合的な学習の時間の研究概要や動画資料を公開。当日は、大妻女子大学家政学部児童学科の榊山敬郎教授による講演、授業別分科会などを実施した。

複線型で英語科学習調整力育成

英語科授業においては、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を充実させる

な学習の進め方を生徒自らが自己選択・自己決定できる環境を整え、学習目標の達成に向けて生徒一人ひとりが自己調整する姿を、資料や動画、発表を通して伝えた。

佐々木ちひろ教師による2年生英語科の授業では、生徒自身が学習計画と振り返りをワークシートにまとめて端末で共有。単元の導入時には、単元全体の達成目標、目標達成度の確認に向けた言語活動、最終的パ

フォーマンテストを提示し、学習の見通しを立てている。

授業中の学習形態は「個人」「ペア・グループ」「教員」の3種類から選択できる環境を整備。学習形態に応じて座席配置を前方後方に分けるなど、学習空間も工夫。教員との対話を望む生徒には、授業の目標達成に向けて必要な学習方略を提案しながら支援し、選択者間で協働する姿も見られた。

複線型授業の実践によって「生徒は個々の学習内容に対して内省することができ、生徒自身に合った学習形態や学習方略を見つけようと考え、自己を認識することができると」などの成果があった。

一方で「協働して学習を進めた方が学習効果の高い領域もある」「本時と次時の学習内容を振り返り、学習計画をその都度調整するための時間が必要」などの課題も上がった。